

【研修参加学生の報告書から】Tropical Fisheries

・熱帯という環境であるがための行動の制限、それ以外にも命の危険に関わる行動の制限と日本では考えられないことが、海外において、フィリピンにおいては当たり前であること、それを認識することの重要性を研修において学ぶことができた。また、コミュニケーションをとるにも、何かの計画を立てる上でも英語という言語の大切さと同時に、日本でもそうだがその土地の言葉を海外から来た人が話してくれることがうれしいというのはフィリピンも同じであり、現地の言葉でのコミュニケーションもその土地の人々に関わる上で重要であることを改めて感じる良い機会であった。
(農林水産学研究科・修士1年)

・日々、先生方の授業やカウンターパートの方との会話などにより耳が英語に徐々に慣れ、研修が終わるころには、大方何を意味しているか分かるようになった。将来、海外で働きたいと思っている私にはとても良いスキルアップにつながった。フィリピンの産業・文化および現地での生活理解を様々な体験を通して学んだ。フィリピンは近年経済成長が著しく、教育に関しても、ほとんどの人が英語とタガログ語などの現地語の二か国語を話せるなど環境は整ってきている。また、水産に関しては、フィリピンでの漁法、養殖、流通やマーケティングなどを学んだ。フィリピンを代表する魚介類や海藻の効率的な養殖方法を見て、日本との魚種・餌・用途の違いを知ることができ、貴重な体験となった。
(農林水産学研究科・修士1年)

・自分の言いたいことが伝わらないときは、文法を気にせず話したり、例えを使ったり、発音を少し変化させたりなど伝えようとすれば相手も同じように理解しようと聞いてくれていると感じた。また、タガログ語を話したとき、現地の方が喜んで下さったので、英語だけでなく、外国に行くときや外国人と話す時は、現地の言葉を覚えて話せるだけでも、コミュニケーションをとるきっかけになり相手との距離を縮めることができると学んだ。また、フィリピンという国のことをよく理解することが出来たと同時に、日本のことを内側からではなく、外側から改めて知ることが出来た。先進国、途上国に関係なく、様々な国と自国を比較することで自国の問題点の解決への糸口が見えていくと感じた。最後にこの研修全体を通して、世界から見ると日本という国の中で成り立つ常識は普通ではなく、異質であることを頭に入れなければならないと知った。現在の日本では外国人観光客や外国人労働者が増加している。恐らく近い将来、日本国内は国際化の影響を大きく受けると考えられる。これから社会に出て日本に貢献していく中で、私は国際化する日本人の一人としてではなく、日本の国際化を担う一人という意識を持っていかなければならないのだと実感した。
(農林水産学研究科・修士1年)

・英語を公用語とする現地の人々とコミュニケーションをとることは、普段から英語で会話をする機会が少ない日本においては体感できないものであり、現在の自身の英語の実力を実感する有意義な体験だった。フィリピンで活動する上で、私たちにカウンターパートが4人ついた。彼らには、現地での調査や施設見学などで行動を共にし、公共交通機関の乗り方や街の案内など様々な活動で協力していただいた。そのうち2人がILP(熱帯水産学国際連携プログラム)のため鹿児島大学のサマーセッションに参加する。その時は、私たちが彼らに授業での手助けや、鹿児島で生活する上で役立つ情報を伝えるなど協力する予定である。このように、お互いが協力し友好的関係を築くことが、国際的に活動していく上では重要なことだと感じた。養殖研究所であるSEAFDECやJICA事務所を見学し、フィリピンの人々だけでなく、現地で働いている様々な日本人を目にしてきた。海外で働き現地で支援や技術協力を行う仕事はとても働き甲斐があり魅力的に見えた。将来このような海外で働く職に就き、鹿児島と海外の地域をつなぐ仕事をしたいと強く思った。
(農林水産学研究科・修士1年)

・活動を通して、日本とフィリピンの水産業の漁具、漁法・養殖法、流通技術等に多くの共通点を発見することができた。同時に異なる点も存在し、特に流通・加工分野に関して、日本の技術を活用できるのではと思う場面が多くあった。そして何より、現地の学生や民間人との交流によって、英語能力の向上を図ることができた。自分よりも若い学生が流暢に英語を話しており、今後の英語学習における大きなインセンティブになった。また、初めて他国の文化や風習に直に触れ、異文化理解・尊重への興味や関心が高まった。
(農林水産学研究科・修士1年)

・現地での授業はすべて英語で行われ、質疑応答もすべて英語だった。日本語がほとんど使われない状況の中で、日が経つにつれて英語に慣れ、リスニング力が確実に身につけている実感があった。また、積極的に発言することも出来るようになった。さらに活動の間には現地の学生と活動以外のこともたくさん話す機会があり、現地の生活や文化なども知ることができた。海外でコミュニケーションをとり、自分で計画し成果を出し、最後に英語で発表も行ったことは、私にとって

初めての経験であり、日本には体験することのできないことだった。また自分自身少し自信が付いた。研修を終えて終わりではなく、この経験を活かして今後自分ができることを考え、少しでも自分が住んでいる鹿児島県に貢献できたらと思う。
(農林水産学研究科・修士1年)

・私は養殖飼料について研究しており、研修ではその実態を知りたいと考えていた。現地の授業ではフィリピンの養殖だけでなく、フィリピンの水産業の歴史や動向、そして現状について学ぶことができた。水産業はフィリピンでも非常に重要で、食料としても消費の多い重要な資源であり、特にマグロは、輸出によって外資を得られる重要な産業であることを学んだ。日本でも魚の輸出が重要視され始めており、鹿児島ではマグロ養殖も盛んで漁獲量が多い。しかし依然として輸出量は多くはなく国内消費が多い。現在、世界では魚食ブームにあり需要が大きい、日本では魚離れが深刻化している。漁師の平均賃金が低く高齢化も進んでいるなど、日本と同様の問題が発生しているフィリピンでは、輸出によって事態を打開しようとし始めており、日本の水産業もこの点は学ぶべきであると感じた。一方で市場などでは氷をあまり使わないなど、衛生面が非常に劣悪であるというフィリピン特有の課題も学んだ。こういった経験を通じて、海外特に東南アジアの水産業の現状と日本の水産業との類似点と相違点、そして互いの特徴と課題点を肌で感じる事ができた。また、以前はこれ以降海外に行くかどうか迷っていたが、機会があれば積極的に海外へ行きたいと考え、同時に将来職に就く際に日本と海外の水産業をつなぐ架け橋のような存在になりたいと考えようになった。
(農林水産学研究科・修士1年)

・カウンターパートや現地の人々に関わることで、英語でのコミュニケーション能力が向上しただけでなく、現地の人々の物事に対する考え方や日本人との違いを感じる事ができた。JICA 事務所を訪問した際は国際協力のもとで行われた事業を学ぶことができた。金銭的、技術的支援は必要であるが、現地の力だけで継続させる必要があるため、国際協力というものの難しさを感じた。
(農林水産学研究科・修士1年)

